

## 書評

### 山下清海編著「エスニック・ワールド—世界と日本のエスニック社会—」

四六判, 264 ページ, 2008 年 4 月刊, 明石書店, 2,200 円 (税別).

今日, 様々な民族が国境を越え, 世界規模で移動している。彼らはこれまでみられなかった多様なエスニック社会を世界各地に, そして日本に作りつつある。本書は, このようなエスニカルな国際社会の状況をグローバルに, かつローカルな視点から描き出すことをねらいにしている。表題は, そうした本書の目的を, 巧みなネーミングによって端的に表現している。

本書の執筆陣は総勢 18 人に及ぶ。はしがきにも特段記されていないが, これらの面々は, ほとんどが日本地理学会の「エスニック地理学研究グループ」(山下清海代表)で活動してきたメンバーである(本グループは 2008 年 3 月, それまでの「移民・移住とエスニシティ研究グループ」(杉浦直代表)を実質的に引き継いだものである)。つまり, あまたある類書の中でも, 本書は日本の地理学界がほこるこの道の専門家たちによって集成された書物であるといつてよい。彼らは, 日本や世界各地のエスニック社会において, 長年のフィールドワークを通じてその現状と課題を追究してきた, 理論を兼ね備えた実践的研究者たちである。

本書のおもな目次はつぎの通りである。

#### 第 I 章 エスニック社会の基礎

- 1 エスニック集団とエスニシティ
- 2 エスニック集団の適応戦略
- 3 エスニック集団の住み分けとエスニックタウン
- 4 エスニック・ビジネス
- 5 エスニック地理学の研究史

#### 第 II 章 世界のエスニック社会

- 1 海外の移民社会  
日系人社会／華人社会／インド人社会

- 2 南北アメリカのエスニック社会  
アメリカ合衆国／カナダ／ブラジル
- 3 ヨーロッパのエスニック社会  
イギリス／ドイツ／フランス／スペイン／オランダ
- 4 アジア・オセアニアのエスニック社会  
中国／シンガポール／タイ・ラオス／オーストラリア

#### 第 III 章 日本のエスニック社会

- 1 アイヌ社会
- 2 日本のコリアン社会
- 3 日本の華人社会
- 4 日本のブラジル人社会
- 5 日本のインド人社会

第 I 章では, エスニック集団, エスニシティ, 住み分け, エスニックタウン, エスニック・ビジネスなどの基本概念を平易に解説するとともに, 地理学的な研究史を概観している。本書の副題が示す「世界と日本のエスニック社会」の考察というねらいに言及しようとするとき, ただちに「世界のエスニック社会」(第 II 章)や「日本のエスニック社会」(第 III 章)の記述に入りがちである。だがそうせず, まず本章を置いた点を評価したい。それは「エスニック」という語が, じつはかなり曖昧な意味を持つ, すでに「新しい日本語」になっているからである。外国語であれば用法のぶれは小さく抑えられるが, 日本語的な外来語の用法は話者によってより多様になる傾向がある。

この点, 「エスニック集団とエスニシティ」を担当した杉浦直氏の解説が小気味よい。韓国料理やタイ料理は日本ではエスニック料理であるのに, 現地に行けば誰もそう思わないこと, フランス料理や中華料理は日本でもエスニック料理とはいえないこと, などの例を挙げながら, 「エスニック」という言葉が, 単に「民族的」というよりずっと色のついた言葉だと指摘している(12頁)。これを評者流に解すれば, 一国の多文化的・多民族的状況において, それが主流派の属性を指す場合には「民族的」という言葉が, 非主流派の場合には「エスニック」という言葉が使い分けられているといえよう。フランス料理や中華料理は, 日

本においてもすでに一定以上の地位を持つがために、もはや「エスニック」ではなくなったのである。この比喩は大変わかりやすく、「エスニック社会」のありさまを学術的に考察する前提としても、有益な概念規定であると思われる。

このあと、他の重要概念の解説が続くが、それらについての言及や批評は紙幅の関係で割愛する。

つぎに、「エスニック地理学の研究史」の概観が続く。この中で千葉立也氏は、日本の社会科学文献に「エスニシティ」「エスニック」などのカタカナ言葉をキーワードとする研究が多数発表されるようになるのは1980年代中頃からだという(40頁)。それは日本においてもニューカマー外国人の存在が目立つようになった時期であり、この頃より、地理学界でもエスニック地理学研究が本格化していった。その後、1989～1992年にかけて雑誌『地理』誌上で「エスニシティ・ジェンダー」(太田勇氏)という連載が企画されたインパクトは大きく、研究史上、一つの転換点になったのではないかと指摘している。

第Ⅱ章では、世界のエスニック社会に関して、国別に具体的な姿を描き出すことに力点が置かれる。まず、海外における日系人、華人、インド人が検討されたあと、南北アメリカ、ヨーロッパ、アジア、オセアニアなど世界各地のエスニック社会の特質が論じられる。このうち、後段の世界各地のエスニック社会については、矢ヶ崎典隆氏(アメリカ合衆国)、加賀美雅弘氏(ドイツ)、手塚章氏(フランス)、石井久生氏(スペイン)、大島規江氏(オランダ)、杜国慶氏(中国)、山下清海氏(シンガポール)、横山智氏(タイ・ラオス)、吉田道代氏(オーストラリア)といった、現地でのフィールドワーク経験を豊富に持つ執筆陣がそれぞれの国の状況を生き生きと描いている。

また、前段で海外の日系人社会について論じた飯田耕二郎氏は、日本人移民が始まった明治元年(1868)から太平洋戦争勃発の昭和16年(1941)にかけて、年次別・渡航先別の移住者数を一人単位で克明な表にまとめている(52-53頁)。日本人移民研究の基礎資料として普遍的な価値を持つといえよう。

第Ⅲ章では、日本国内のエスニック社会が論じ

られ、アイヌ、コリアン、華人、ブラジル人、インド人が検討されている。ここでアイヌが取りあげられていること自体評価したいが、本章において評者がやや疑問に思うのは、これら性格の異なる来訪者たちを同列に並べ、枕詞なしに即、個々の内容に入っていることである。すなわち、コリアンと華人については、別章の杉浦直氏の言葉を借りるなら、「韓国系日本人」「中国系日本人」(14頁)としても差し支えないオールドカマーの彼らに加え、これとはまったく意味を異にして入国する多くのニューカマーがおり、両者は分けて論じられるべきではないかということである。その「意味」の違いとは、日本国内における居住地の違いはもとより、地域社会との関係の持ち方、日本社会に突きつける課題等、様々な点で相違となって現れているといえよう。

また、ブラジル人とインド人を並列しているが、ブラジル人の大半は日本にゆかりを持つ人たち、つまりは日系人である。これに対し、インド人来訪者たちははたしてどのような属性を持つのだろうか。両者の間にはやはり大きな「意味」の相違があるというべきであろう。このように二重、三重に性格の異なるものを論じるとき、ある程度それらの全貌を俯瞰するような解説、すなわち枕詞があった方が、一般読者にも事の本質がより理解しやすくなるのではないと思われる。折しもブラジル移民の節目にあたる今年、「大いなる100年の航海」の途上で立ち寄ったこの「第二の故郷」で、しばし時を送る彼らへの励ましにもなると思う。

やや評者の個人的思いに踏み込んだ点をお許し願いたい。本書ではこのほか、計20点の「コラム」によって各テーマが掘り下げられ、テーマ別・地域別の「文献案内」によってエスニック社会をいっそう理解できるための配慮がなされている。また、著者らの撮影による多数の写真が使われており、どれも大判で見やすく、迫力がある。さらには、コピーしてそのまま使えるような地図・グラフ・表等の資料も多く掲載されている。

地理をはじめ、社会科で民族・文化の授業を作る際など、中学・高校の先生方にもぜひ一読していただきたい良書である。(戸井田克己)